

もくじ

門井掬水の色紙 … P1

あだち民具図典④(ダイカイ) … P2

足立氏ゆかりの星兜鉢 … P2 はい、文化財係です②⑥ 石造聖観音及び地藏坐像 … P4

足立史談

第 638 号

2021 年 4 月 15 日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

昭和足立の芸術家

門井掬水の色紙

「岡田新右エ門との交友」

小林 優



図1 門井掬水 色紙《翁》 絹本金地着色 昭和時代中期
当館蔵（令和 2 年度寄贈）

文化十二（一八一五）年の千住酒合戦に代表されるように、多くの文人たちと交友を結び、書画文芸を楽しむ文化を根付かせてきた足立。その文化史は、先達となった郷土史家や足立史談会、そして資料や情報を伝えてこられた多くの方々のご協力により、調査が積み重ねられ、明らかとなってきました。

その中で、近年、特に多くの作品・資料の確認が相次ぎ、調査が進もうとしているのが、明治後期から戦前・戦後にかけての足立地域における芸術家たちの活動です。

今回紹介する、長門町（現・足立区中川付近）のあたりに暮らした日本画家、門井掬水（かどいきくすい、一八八六―一九七六）による色紙群も、そうした戦後の足立における画家と地域の人々の親交を物語る資料の一つです。

■江戸から昭和、芸術家とのつながりを楽しむ足立の人々 商家や農家の主人がそれぞれに書画や俳諧など文人的な教養を持ち、酒井抱一や谷文晁ら文人たちとの交友を楽しんできた足立地域では、そのような文人交友華やかかなりし江戸時代以降、明治時代にも、絵師や書家との交友を楽しむ地域性が継続されてきました。また、大正から戦前・戦後の頃には、明治以降の芸術活動の中心地である上野にも程近いという点や、鉄道等

交通網の発達などもあってか、千住をはじめ足立区内地域に暮らす芸術家も多く現れるようになります。その中には、例えば『足立史談』六二八号（二〇二〇年六月号）でも紹介した千住大川町の日本画家、池澤青峰のように、地域の人々との親しいつながりから、その地域で支援体制が生まれ、画家としての活動を支えられる例もありました。

江戸から昭和にかけ、足立地域では画家など芸術家と親しみ、書画文芸の楽しみを共有する文化が人々の中に根付いていました。門井掬水もまた、そのような文化を物語る足立の画家の一人に位置付けられます。

■日本画家、門井掬水 門井掬水は、近代画壇において上村松園と並ぶ美人画の大家、鐫木清方（かぶらぎきよかた、一八七八―一九七二）の一番弟子にあたる人物です。明治十九年、茨城県鹿島郡大洋村（現・茨城県鉾田市）の生まれで、本名を「英」と言います。幼少の頃に、両親と共に東京の本郷湯島へと移り、湯島小学校に通う十歳の頃、商家を営む両親と縁のあった清方に絵を学び始めました。清方はまだ二十歳に満たず、師の水野年方について新聞の挿絵などを手掛けている頃でした。後年の清方の門人では、川瀬巴水や伊東深水などが著名ですが、この掬水こと門井英が、清方が指導する最初の弟

子となりました。

清方の下で着実に画法を学んだ掬水は、二十歳の頃より、清方が結成に参加した「烏合会(うごうかい)」などの美術団体に作品を発表するようになります。さらに、大正四(一九一五)年に清方の門下たちが新たな作品発表の場として「郷土会(きょうどかい)」を結成すると、門下の最古参として運営の中心を担いました。

清方の画風を継承した静謐な女性像を得意として、官設公募展である帝展や、かつては千住ゆかりの高橋廣湖も参加した異画会(たつみがかい)などにも出展・入選を重ね、昭和初期には師の清方と共に目黒雅叙園の装飾画制作にも携わるなど活躍した掬水ですが、第二次世界大戦の戦況悪化と東京大空襲による東京牛込の自宅焼失に伴って静岡へと疎開



図2 門井掬水 色紙《お多福》紙本着色
昭和30(1955)年 当館蔵
(令和2年度寄贈)

し、この時期の多くの画家たちと同様、作品の発表から遠ざかります。そして戦後、東京へと戻った掬水が住まいとしたのが、長門町のうちの、現在、足立区中川四丁目と葛飾区亀有五丁目の接するあたりでした。

■掬水と岡田新右エ門 掬水と長門町付近の人々の親交については、『足立史談』五六八号(二〇一五年六月)の「門井掬水と長門町の人々・季節を彩った日本画家の作品紹介」でも紹介していますが、掬水は画家として、また地域の一員として、羽住家など大谷田・中川地域の名士と交友を持ち、同地では掬水を囲んだ書画会なども行われていたことが伝わっています。そして令和二年、苺農家として戦前の地域農業で大きな一翼を担った岡田新右エ門氏へと掬水が贈った複数の色紙が確認され、郷土博物館に寄贈されたことで、両者の交友が明らかとなりました。

岡田新右エ門氏は、東渕江温室苺出荷組合を設立して、その組合長を務めた人物です。大正十一(一九二二)年より、苺の促成栽培に着手し、出荷組合の仲間である農家と共に栽培方法と促成栽培用のフレームの研究を重ねて、大きく良質な苺の生産に成功しました。苺の生産は昭和十(一九三五)年頃に終了しますが、新右エ門氏は、その後も変わらず地域の運営に努めました。

掬水は、新右エ門氏の屋敷の付近に借地をしていたと伝わり、両者は近所として親しく見知った間柄であったと考えられます。また、新右エ門氏は謡曲を嗜む風流人でもあり、その面でも、江戸の情緒を愛した清方の系譜を継ぐ掬水とは互いに親しみをもちえたのではないのでしょうか。

今回確認された色紙は計十一点にのぼり、作品やたとう紙(包み紙)に記された年記から、掬水が東京へ戻って以降、昭和三〇(一九五五)年から四〇(一九六五)年の頃に、掬水から新右エ門氏へと贈られたものと見られます(図2・3)。そもそも色紙は、公的にも用いる掛軸や屏風以上に、私的な楽しみや贈り物として用いられる側面が強いものですが、十一点の色紙の内、少なくとも三点は干支にちなんだ画題で、新年や初春の私的な挨拶の品として贈られたと推測されます。さらに図1の《翁》は、「祝岡田氏叙勲 掬水」と署名して、新右エ門氏の叙勲祝いとして贈ったものであることを伝えて

おり、他九点が紙地である中でこの一点だけ金地に描いていることも、この《翁》が掬水からの祝賀品として特別に手掛けたものであることを物語っています。

大画面の屏風や掛軸だけでなく、時にこういった色紙や短冊の類が、作者と需要者の関係性を如実に物語る場合があります。今回紹介したこれらの色紙は、掬水にとって新右エ門氏がいかに祝いや年ごとの挨拶を欠かさざる近しい相手であったかということを教えてくれるのです。

足立を舞台とした芸術活動は、常に地域の人々と共にありました。掬水の色紙のように、今日に伝えられた作品・資料の一つ一つが、当時の交友を紐解き、地域の文化史を明らかにする重要なヒントとなるのです。

(郷土博物館学芸員)



図3 門井掬水 色紙《弁財天》紙本着色
昭和40(1965)年 当館蔵
(令和2年度寄贈)

あだち民具図典 ④
くろうるし うち しゅ むし もの ようき
黒漆内朱蒸物容器

足立の歴史文化を知る手立てとなる郷土博物館の収蔵する生活資料の紹介を行います。

■旧家に遺る道具 丸い椀型の右の

写真の道具は、区内では名称もその使用方法も不明な道具です。郷土博物館では船津家と馬場家という旧家に伝わったものの3点を所蔵しています。昨年、日比谷家にも1点伝来していることが判明しました。この道具が使用されたのは、おそらく昭和のごく初めのころまでで、残存状況から、裕福な旧家でのみ使用されたものと考えられます。

■神奈川県のダイカイ 神奈川県の中央部で全く同型のものが、伝来して、そこでは、ダイカイとよば



直径 30cm、高さ 24cm
日比谷家所蔵

れています。祝儀、不祝儀の際に、赤飯を入れて贈るときに使われるもので、通常は二つ一組で、これを箱に入れ綱を掛けて天秤棒で担いで運ぶものとされます。付き合ひの深さによって一荷(二組)、半荷と量を調整しました。

贈られた家は、座敷にダイカイを並べて飾り、中身の赤飯は、その後、来客に配られます。平塚市の事例から足立区内でも同じように使用されたのではと考えられます。

■名称を考える ダイカイは神奈川県中央部での呼び方で、食物を入れて運ぶ道具に行器(ほかい)というものがあることから、漢字にすると「大器」なのかもしれません。

各地に残されているものも、さまざまな名称で、全国的な統一名称はなく、これ自体を行器と呼んだり、丸い形から饅頭行器(まんじゅうほかい)という呼び方もあるようです。また、似た形の道具に食籠(じきろう)というものがあり、そのままに食籠とも呼ばれています。小田原食籠という呼び名もあり、漆器の産地であった小田原で考案された形であった可能性もあります。

他の地域の事例と比較することにより、現在では失われた足立の伝承や他地域との交流などを考える手立てとすることができます。

(当館学芸員 萩原ちとせ)

足立氏ゆかりの星兜鉢 東京国立博物館で公開

東京国立博物館で展覧会

本誌六三六号(今年二月)でご案内した伊興経塚の十二間星兜鉢(以下「星兜鉢」)ですが、東京国立博物館(台東区上野公園)の平成館考古展示室で公開されています。

『東京国立博物館ニュース』第七六四号(今年二月発行)で「現存最古級かつ経塚出土品としては国内唯一の貴重なもの」と紹介され、製作年代が十一世紀(平安時代後期)と判明したことや、また伊興経塚自体の造営年代が十三世紀末から十四世紀初頭(鎌倉時代の後期から末期)であることがコンパクトに紹介されています。

また、同館研究員の佐藤寛介さんのコメントとして同誌で「十二間星兜鉢を所持し、伊興経塚を造営したのは、武蔵武士の足立氏ではないかと想定しています」と結んでいます。

足立氏とのゆかり

武蔵武士だった足立氏については、室町時代の足立大炊介が領主だった石塚郷(現在、足立区栗原の石塚公園として名前のこります)が最後のゆかりとされていました。



東京国立博物館での展示風景
(同館 佐藤寛介研究員提供)

足立氏の系譜は古代の足立郡司につながり、ひいては現在の私たちの区名、足立区の名前の由来にもつながっています。このことをふまえると、今回の佐藤研究員の調査研究は、足立区にとって重要な内容であることは多言を要さないでしょう。

会期は九月二〇日(月・祝)までと比較的長期間です。一四〇年ぶりに修復が終わり公開される歴史的遺産をぜひご覧ください。

(学芸員・多田)

はい、文化財係です²⁶

石造聖観音
及び地蔵坐像

ふんかざい

足立区には百を超える寺院があります。そのため足立区には文化財に登録されている仏像が多くあります。しかし、その多くは本堂の中に安置

されているため、実際に拝見する機会は限られています。そこで今回は、現地で見学することができる龍慶寺（綾瀬七一〇—一八）の「石造聖観音及び地蔵坐像」（足立区登録有形文化財）をご紹介します。

龍慶寺は、正保三年（一六四六）の創建で、開山は天寶秀梵、開基は牛込五郎兵衛と伝わり、山号は淵江山です。

山門前に立つ

て本堂を望むと、

手入れの行き届いた松の木が参道の両脇に並んでおり、とても趣があります。

聖観音

そして石造聖観音及び地蔵坐像はその松並木の奥に参道を挟んで並んで立っています。

■奉納の経緯

参道から本堂に向かつて右側に立っているのが聖観音像、左側に立っているのが地蔵坐像です。両像とも三段の大きな台石の上に安置されており、全体の高さ

地蔵坐像

はおよそ三メートル程です。

両像の台石の正面には、大きく「幸手屋 万右衛門」と刻まれています。万右衛門は神谷万右衛門のことで、幸手屋は神谷家が明治頃まで千住二丁目の旧道と見番横丁の角に営んでいた旅籠屋です。両像の背面には、天保五年（一八三四）に造立されたこと、造立の目的が先祖代々の供養や家門繁盛・子孫長久だったことなどが刻まれています。

この像を彫った石工は、千住四丁目の助七です。助七の詳しいことはわかりませんが、神谷万右衛門と同じ千住宿に住んでいたことから依頼されたものと考えられます。

■小松石 両像の石材は神奈川県真鶴町で採石された小松石です。小松石は、四十年前の箱根山の噴火の際に流れ出た溶岩が固まってできたもので、本小松石や伊豆石などとも呼ばれ、現在でも最高級石材のひとつとして知られています。真鶴は海に面しており、輸送に利便性があったので、関東では多く用いられていました。江戸城の石垣もすべてこの石でできているそうです。

両像ともに本体と光背が一石で出来ており、これだけの大きな石を準備するだけでも大変な費用が掛かったことが推測され、神谷万右衛門の財力をうかがうことができます。

両像は、千住宿の人々によって造

られたという点や小松石の一石で造られている点が高く評価され、登録有形文化財となりました。

■像容 聖観音は、正しくは聖観世音菩薩、または聖観自在菩薩といいます。菩薩は悟りを開く前の姿のため、髻（もとどり）を結び、宝冠などの装飾品を身に着けています。

地蔵菩薩は広大な慈悲で生あるものすべてを救うといい、菩薩でありながら僧形をしています。右手に錫杖（しゃくじょう）、左手に宝珠（ほうじゆ）を持っています。

両像ともに、とても柔和な表情をしており、装飾品なども精巧に彫刻されています。助七は相当腕のいい職人だったのでしょう。

■両像の修復 両像の台石には、経年による陥没などがあったため、令和三年二月に龍慶寺によって修復がなされました。そして、より多くの人が両像を見やすくなるようにというご住職のご意向により、これまで台座の中央に位置していた両像を、参道から見やすい台座の端に寄せて安置しなおされました。

小松石は、時間の経過とともに石の表情が変わっていくといわれています。両像が末永く守り続けられていくなかで、今後も色々な表情を見せ続けてくれることでしょう。

（文化財係学芸員 佐藤貴浩）

